

「伝えること」「連れて来ること」

(ヨハネ一・三五〜五一)

「先生、やせましたね」「いいじゃないですか」「ステキです」「どうして来たのですか」「いや意志が強いね」四七年に及ぶ人生の中でこんなにもほめられたことは後にも先にもないのではと思つたほどである。学位よりも、理事長に就任したことよりも一七キロのダイエットかと思うと何とも言えない感じもするが、褒められて気分が悪かるうはずもない。御機嫌で教団主催の研修会から帰つてきた。

閑話休題。私たちが所属している日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団では牧師のことをよく「伝道者」と言う。神学校でも「牧師養成」とは言わず「伝道者養成」と言い、「聖霊教団」という言葉と同じくらい良く用いられるのが「伝道教団」という自己規定だ。またこの五月には伝道大会が開催される。それくらい「伝道」に力を入れていなのだ。しかし「伝道」をすすめる前にまず「伝道」とは何かということを考えることは大切であり、今朝のテキストはこの問いに二つの決定的な答えを提供している。

一、イエスを紹介すること

伝道とは何か。この問いに対する第一の答えはイエス・キリストを人に紹介することである。今朝の個所にはバプテスマのヨハネ(三六節)、アンデレ(四一節)、そしてピリポ(四四節)によるイエスの紹介が記されているが、その仕方は様々だ。バプテスマのヨハネはまだその働きを始めていないイエスを見るなり「世の罪を取り除く神の小羊」と言つて、イエスについての正確な描写をしたし、ピリポはピリポでイエスに出会つたばかりなのに彼のことを「旧約の預言の成就」だと言つて憚らなかつた。彼らは僅かの時間でイエスの内にある本物の輝きを見いだしたのだ。

ではアンデレはどうだったろうか。確かに彼もまた兄ペテロに「私たちはメシアに会つた」と語つている。しかしアンデレのメシア理解はバプテスマのヨハネが見たような罪からの救いをもたらす者ではなかつただろうと推察される。アンデレが見たのは恐らくより政治的な、つまりローマの圧政からイスラエルを救う救国の英雄であり、王のような存在だった。しかしだからと言つてアンデレの言葉が無意味だと言ふ事には決してならない。確かに理解は十分ではなかつたかもしれない。だがアンデレは実兄に対してイエスのことを躊躇なく、大胆に紹介したのだ。この姿勢こそ

私たちが学ぶべきものである。イエスについて全部知つてから伝道しましょうというのでは、伝道は永久に不可能だ。だからどんなに拙い言葉や方法であつたとしても私たちに出会つてくださったイエスのことを紹介しようじゃないか。それはもう立派な伝道なのである。

二、イエスのもとに連れて来ること

ではもう一つの答えは何だろうか。それは人々をイエスのもとに連れて来ることだと言える。アンデレはペテロに「メシアに出会つた」と語つたに留まらず彼をイエスのもとに連れてきた。ピリポもまた自分も同じガリラヤ地方の出身のであるにも関わらず「ナザレから何の良いものが出るだろう」といつてイエスのことを小馬鹿にしたナタナエルの言葉に屈することなく「来て、そして、見なさい」と言つて彼をイエスのもとに呼び寄せた。ある学者はこの個所に「点火された一本のたいまつは別のたいまつに火を付けるために役立つ」というコメントを寄せているが、確かにここにはバプテスマのヨハネからアンデレ、更にアンデレはペテロに、またピリポはナタナエルにと言つたバトンパスが見られる。しかしなぜ彼らは斯くも大胆に伝道出来たのだろう。答えは簡単だ。それは彼らはイエス・キリストを体験していたからで

ある。だからこそ言葉による告知に限界を感じた時、ピリポは「来て、そして見なさい」と言う事が出来たのである。イエスとの生きた出会いの体験。ここにこそ伝道の原動力があるのである。

* * *

このように伝道とは人にイエスを紹介し、かつ人をイエスのもとに連れて来ることである。このうち人にイエスを紹介することは今日も問題なく出来る。だが人をイエスのもとに連れて来るというのはどうだろうか。かの日と異なり、今イエスは天に居られるのだ。どうして彼のもとに人を連れて来る事が出来ようかと思う向きもあるかもしれない。しかし安心して良い。イエスは言っているではないか。「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいます(マタイ二八・二〇)」と。パウロもまた教会はキリストのからだだと主張しているではないか。(エペソ二・二二、二三)。そう考えると最も簡単な伝道は「イエス様は救い主です」「教会に来ませんか」である。難しいことはなにもない。実は伝道教団を自認する私たちの群れでも二〇一四年の受洗者数は五百に満たない。友よ、もう少し伝道しようじゃないか。難しいことばはいらない。「来りて見よ」。まずはそこからだ。伝道しよう！